寄稿文

日本のスノーリゾートに幸あれ

一般社団法人 日本スノースポーツ&リゾーツ協議会 副会長

久保 英二

はじめに

2024年元日に起こった能登半島地震、多くの方が亡くなられ今なお余震と寒気の中さらに多くの方が避難生活を余儀なくされています。謹んでお悔やみを申し上げますとともに被害に遭われたすべての方々に心からお見舞い申し上げます。悲しいニュースで始まった2024年ですがパリ五輪などスポーツイベントも多数開催されます。日本中がスポーツや余暇を通して少しでも笑顔になれることを心より願っています。

日本のスキー 激動の100年

オーストリアのレルヒ少佐によってスキーが日本に紹介されてから100年余り、日本のスキー業界は半世紀のゆっくりとした成長のあと高度成長期、バブル景気の中で急激な発展を遂げた。しかし長野五輪後の25年は緩やかな衰退と再編を繰り返し、コロナを経て今“改革の時”を迎えている。 私自身を通して日本のスノースポーツ&リゾーツ発展への願いを書きたいと思う。

HEAD Japan ウィンタースポーツ研修会 札幌テイネリゾート 2019年1月

スキーとの出会い
白銀の世界にノックアウト

私が小学生だった昭和40〜50年代はまだ民宿宿が主流で、毎年年末年始は家族とスキー場で過ごした。紅白歌合戦や芸能人かくし芸大会など人気テレビ番組を、餅やみかんを食べながらコタツで見ていたとても平和な時代だ。
家族とスキー場に出かけるときの胸の高まりは今でも鮮明に覚えている。灰色の街並みから白銀の世界へと入っていく瞬間、日常とは全く違う何もかもが真っ白に塗り直された別世界へワープする、そんな ”わくわくを与えてくれるスキー” に少年時代の私は夢中だった。
バブルで賑わう大学時代には世間からスキーが注目され始めていた。好景気に沸く日本では地方再生だ、リゾート開発だと新たなスキー場がどんどん作られ、あの映画の大ヒットで本格的なスキーブームとなった。大学院（中途退学）に進みさらにスキーにはまっていた私は、『もしかしたらこれなら大好きなスキーで食っていけるぞ?!』、と就職を選ばず ”オーストリアへの留学” を決意した。

好きなことを
仕事にしようで渡欧
帰国したらブームは終了

当時アルペンスキー強国といえばオーストリア、お国柄的には文化の中心でお高くとまっているウィーンに対しチロルやザルツブルグなど西部の人たちはとても素朴、ちょうどベルリンの壁崩壊後で冷戦時代終結から欧州統一へ向かう激動の時代でもあったが、スノーリゾートではゆったりとした時間が流れていた。
さまざまな方にお世話になって何とか留学費用も稼ぎ出してようやく辿り着いた憧れのオーストリア、5年間誰にも遠慮することなく好きなスキーをとことんやりまくった。国立スキー学校に所属しドイツ語漬けの毎日だったが、数年で目指した資格も取得でき、大変満足のゆく留学であった。その頃ヨーロッパではJAPANブランドのスキーやウェアが大流行、同僚のトップデモたちが車や電化製品同様にJAPANへ強い憧れを抱いていたのが、強く印象に残っている。
留学を終えて帰国、夢と希望に満ち溢れてスキーメーカーの日本支社に就職した私だったが、そこには全く別の現実が待ち受けていた。

すでにバブルははじけ大型スポーツ店の倒産やスノーリゾートの倒産なども始まり、入社時100名以上いた社員が2年後には15名までリストラされた。『失われた20年』のはじまりである。
日本のスキー人口は長野五輪開催の1998年に1,800万人とピークに達するも、その後はひたすら減少を続け、2020年には430万人にまで減少となる。スキー板の年間販売数でもここ5年は25万台前後くらいのレベルとなっている。その間私自身は数多の危機に遭遇するも幸いにもなんとか業界の荒波を乗り越え今に至っている。
はたして世界のスノーリゾートはどうなっているのか。実際この20年間でヨーロッパのスノーリゾートは驚異の発展を遂げている。以下でその詳細をご紹介し日本のスノーリゾート復活のヒントにしたいと思う。

欧州スノーリゾート発展の背景に学ぶ
インフラ整備・エリア拡充・通年リゾート化

私がオーストリアで過ごした90年代前半、スノーリゾートのインフラは当時の日本と同じかやや遅れている印象だった。それがEU参入と通貨統合の2000年前後くらいから流れが大きく変わる。ロシアの新興富裕層が冬のバカンスを楽しむべくこぞってアルプスへやってきたからだ。発展するEU諸国に加え多額のロシアマネーがアルプスの山々を潤していく。この機を捉え各地で『スキー場インフラへの投資』が加速、ホテル施設も近代的なものへと次々に建て直されていった。その後ロシアの勢いが衰え始めるのだが、ターゲットを今度は東欧の新興富裕層へと段階的に変換していくことで窮地を乗り切っていく。しかしその頃スノーリゾートの競合相手はもはや同業者ではなく多様化する旅行先（地中海の島々やエジプト等）が共通の敵となっていた。そこで考え出されたのが、より魅力あるデスティネーションとなるためのプランだ。
例えばオーストリアでは周辺地域との共存を唱えた『エリア拡充構想』と夏季休暇を求めてやってくるファミリーを積極的に取り込む『通年リゾートへの転換』を行った。ゴンドラや山頂レストランなどへの投資も夏季営業で稼げれば回収が早まるし、通年雇用でより安定した経営が可能となる。一つのエリアの成功がムーブメントとして他地域へも波及することで、オーストリアアルプス全体が更なる発展を遂げていったのだ。

オーストリア・セルデン氷河スキー場
2023年10月

私は毎年イタリア、オーストリアを仕事で訪れていたのでその変遷を目の当たりにすることになるのだが、訪れるたびに最新の施設が増えていて驚かされたものだ。同時期スキーマテリアルの販売もショップ経由から毎年最新の機種を借りられるレンタルビジネスへ切り替えが加速、より効率的に稼げるレンタル商材およびオペレーション関連のソフト開発がどんどん進んでいった。この発展はコロナ禍でいったん中断していたが、この冬に関してはすでに秋までに各リゾートのホテル予約はほぼ満室の状況まで回復している。

日本のスノーリゾートは必ず発展する

小泉政権で観光立国を目指す政策へと舵を切った日本、世界から見た日本の魅力は年々世界中へと拡散され、いまや一番行きたい国のトップを常に競い合う状況だ。その中で日本の雪山、ウィンタースポーツの魅力がこれまでになく注目されている。国内メディアでは地方の高齢化、就業機会の少なさや収入の低さばかりが取りざたされてきたが、いまやニセコのように時給を3倍にしても解消できないほど人手が足りていないエリアも出てきている。
日本のスノースポーツ&リゾーツはオーストリアの例からも分かるように、インバウンドへの対応いかんでその将来の明暗が分かれるであろう。
確実な需要の分析に基づいた10〜20年の長期プラン策定が早急に行われるべきで、状況変化への柔軟な対応も求められる。またリゾート地域を取り巻くシステム全体が機能するよう業界と地方行政が連携してはじめて発展が見えてくる。
もちろん可能性のあるエリアの取捨選択が先だが時代に合わないルールや条例の見直しも必要だ。衰退を嘆くだけでなく、ほかの国や地域にはない日本の素晴らしい自然や文化に目を向け、再度発展させるために何が必要なのかを真剣に議論すれば、必ず明るい未来が見えてくると私は信じたい。

人生一度きり
遊ばないでどうする！

私の会社はウィンタースポーツ（スキー・スノーボード）、ラケットスポーツ（テニス・スカッシュ）、ウォータースポーツ（ダイビング・スイム）の3部署から出来ているが、アクティブな社員が多いのが自慢だ。
コロナでプログラム自体が中断されてしまったが2019年まで各事業部が担当を替えながら社員研修を行っている。 私も入社早々幹事を任され北海道でのウィンタースポーツ研修の企画・実行を担当した。アスピリンスノー＆快晴無風という最高の条件に恵まれ、社員たちの普段は見ることのできないリラックスした素晴らしい笑顔をたくさん見ることができた。この研修プログラムの再開は必須である。”本来スポーツは遊び、遊び道具を販売する社員が遊ばないでどうする”が会社のスローガン、社員みんなで遊びを率先してなおかつ仕事を楽しむ、そんな会社をこれから目指して行こうと思う。

皆様の益々のご発展を祈念するとともに日本のスノースポーツ＆リゾーツの発展にも大いにご期待いただければと思います。

日本のスノーリゾートに幸あれ！

久保 英二　／　KUBO Eiji
HEAD Japan 株式会社 代表取締役　／　Representative Director ｜HEAD Japan Co., Ltd.

1965年生まれ。
北海道大学・農学部卒業後、同大学院在学中にオーストリアへ留学。ブンデスハイム（国立スキー学校）でスキーを学び、オーストリア国家検定スキー教師資格を取得。ノルディカやベネトンなどイタリア企業で20年以上スキー＆アウトドアビジネスに携わる。その後古巣オーストリアのHEADグループへ転職、現在に至る。
日本スキー産業振興会専務理事、日本スノースポーツ＆リゾーツ協議会 副会長。